

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	16H06309	研究期間	平成28(2016)年度 ～令和2(2020)年度
研究課題名	浅海底地形学を基にした沿岸域の 先進的学際研究－三次元海底地形 で開くパラダイム－	研究代表者 (所属・職)  (令和3年3月現在)	菅 浩伸  (九州大学・比較社会文化研究 院・教授)

【令和元(2019)年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準	
	A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
(意見等)		
<p>本研究は、最先端のマルチビーム測深技術とその他の方法を組み合わせて浅海域～沿岸域の精密地形図を作成し、未知の海域の可視化を目指すものであり、その上で浅海底地形学を開拓するとともに、自然科学から人文・社会科学に至る学際研究を進めて、総合的環境理解につなげることを目的としている。</p> <p>本研究で、これまで空間解像度の低かった浅海底の地形データを精密化することに成功し、解像度の高い地形データが浅海から沿岸にかけてシームレスに得られていることは評価できる。</p> <p>一方、地図を活用した沿岸環境の総合的理解、特に、その社会文化的側面については十分な研究成果が得られておらず、新しい学際研究の創出に向けて更なる努力が必要であるが、総じて高く評価できるともの判断する。</p>		

【令和3(2021)年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、十分ではなかったが一応の成果があった。
B	予定されていた海域の一部では高解像度の3次元海底地形データが取得できており、グレートバリアリーフでの調査や人文地理学的研究でも成果を上げている。しかし、マルチビームを用いた測深の位置精度を1桁向上させるという研究ツールの強化は十分に行われておらず、また予定されていた海域の多くにおいて測定が完了していない。